微に入り細にわたって、規定しているが、これは医師身分として独特の勤務体制が要求されるため厳しい拘束と制約がなされていたものと解される。また、同じ様な規定が四丁と十五丁の二項目にわたって記載されているが、これは本亀鑑が何度か追加記録された事を物語っているものと思われる。

（福岡県苅田町）

広瀬旭荘門人「古谷道庵」

末中哲夫

〔略歴〕

文政元年（一八一八）長州藩領豊浦郡宇賀本郷（現豊浦町）の村医の家に生れた。名幾太郎。字士先・司之。号柳村・玄遠・望洋館主人。通称修平・秀平。

一二歳の時、二見（現豊北町）佐々木発平に受読。一四歳の時、萩に出て松村玄機に入門、医学を学んだ。さらに木村藤太に入門、『小学』を学んだ。一六歳の時、豊後国日田の咸宜園に入門、広瀬旭荘の門に入った。一九歳の時、父恵仲が没したため、一時帰郷し、古谷家を嗣いだ。天保一〇年（一八三九）二二歳の時、大坂に出て、当時開塾中の旭荘に入門し、居ること四カ年。二五歳の春、旭荘に随行して大村に赴き、師とともに藩士らに講義し、また

和蘭船に関心を示し、中国事情の風説を聞いた。二六歳の五月に、旭荘の江戸行に従い、坪井信道に蘭書読解の指導をうけた。弘化二年（一八四五）一月、二八歳の時、呼び戻しをうけて帰郷した。のち三五歳の時、半年ばかり備前国金川の難波抱節に学んだ。故郷の地域医療に専念、子弟の教育に尽した。

平田篤胤・金沢正志斎・藤田東湖・吉田松陰・久坂玄瑞らの著作に触れ、明治期には福沢諭吉の著作のほか、各種新聞を読むなど、時勢の推移によく注意した。旭荘のいう「活学」の主旨を深める努力をしていたようだ。

明治一一年（一八七八）五月二十日歿。六一歳。

〔資料〕

○名称　『古谷道庵日乗』。豊浦町中央公民館保管。

○体裁　A5判。一部有罫紙を使用するほかは白紙無罫紙使用。袋綴書冊形態。道庵自筆による整理番号は巻一～巻一一五。巻三七欠。総丁数六一八六。漢文。

○内容　天保七年（一八三六）四月二十日～明治一一年五月十四日。

大坂の旭荘の塾に入門、四ヵ年の間に、信任を得て、代行、塾監をつとめ、京、摂、南紀、大村など各地に随行した記事が多い。旭荘の人間像をよく示している。

医学関係では、安政年間の虎狼痢流行や、郷里周辺の痘瘡事情をよく伝えている。

物価については詳細を極め、茯苓・雲州人蔘、米麦薪炭、帛綿布、金銭価格、楮幣価などの高下の状況を記し、幕府倒壊寸前の地域物価の動向をよく把えている。

開国後の風説にたいする民衆の反応ぶりも詳しい。

〔面識のある主な人々〕

○大坂　坂本源之助・頼新太郎・小野伝・相良春栄・日高涼台・高良斎・松村文雄・日野葛民・篠崎小竹・後藤松陰・間剛之助・華岡徳太郎・同直蔵・僧体良・岡村高四郎・村上代三郎・吉田吉之助・大熊文叔。

○江戸　坪井信道・同丹宮・伊東玄朴・阿部冲庵・相良文敬・手塚謙蔵・黒川良安・箕作阮甫・青木謙蔵・広瀬元恭・鈴木春山・林洞海・川本幸民・同文治・佐渡良益・大島周貞・梁川星巌・塩谷良平・松崎慊堂・大槻盤渓

○大村　朝川善庵・宮川祐吉・前川文蔵・長与俊達・井石

甚吾平・古川与十・角野純三郎・三宅大蔵
○日田　広瀬淡窓・牧逸作・武谷祐之・麻生伊織

〔参考文献…『豊浦町史』、『豊北町史』、『長門市史』、『萩市史』、『広瀬旭荘全集』、『淡窓全集』ほか〕

（早稲田大学大学院教育学研究科）

『回生録』の研究（1）

昼田源四郎[1]、末田　尚[2]

はじめに

『回生録』は、広島県山県郡大朝村（現大朝町）で周辺村人たちの診療に従事した漢方医家三代にわたる診療録である。（この概要については、すでに末田が第八九回日本医史学会総会で発表した）。本研究では、初代・進藤周岱による文化十二年（一八一五）から文政二年まで五年間の診療録をおもな史料としてもちいる。

『回生録』は文字どおり江戸時代庶民のカルテであり、それ自体も貴重な史料だが、診療録と平行して医師の日記がつづられ保存されているため、いっそう史料的価値が高いものとなっている。『回生録』をおもなテキストとし、日記を補完的に読み解くことで、江戸時代の庶民の病気の